

第4回「オール埼玉医大 研究の日」開催報告

村上 孝

(医学部 基礎医学部門 微生物学)

令和5年11月11日(土)、第4回「オール埼玉医大 研究の日」(以下、「研究の日」)が毛呂山キャンパス・カタロスタワーで開催されました。昨年までは新型コロナウイルス対策が「with コロナ」として日常になっていましたが、令和5年5月からは季節性インフルエンザと同じ「5類感染症」の扱いに分類が変わりました。これにより、感染対策は個人や事業者の判断に委ねられることになり、私たちも大きな転換点を迎えました。実際、この制限緩和によって多く学術集会等もオンラインから対面開催に戻っていききました。今回の「研究の日」では、教職員一般を対象にした午前の部(第一部)もようやく対面で開催することができました。この第一部の対面ポスター発表は、もともとコロナ禍以前から企画されたもので、ようやく日常が戻ってきた実感も湧き、感慨深いものがありました。昨年はオンライン開催を試みたものの、対面交流の良さが際立ちました。第一部では学内共同研究の促進を意図したもので、各キャンパスから約50件のポスターが集まり、ユニークで高品質の取り組みや研究手法が紹介されました。発表会場のフロアスペースと発表者数のバランスがほどよく調和していたこともあり、聴きやすく、討論を交わしやすい雰囲気にあふれていました。専門分野を超えた交流がお互いの

好奇心をかき立てている様子もみられ、参加された方々の満たされた表情がとても印象的でした。

後半の第二部(午後)では例年通りの対面発表に加え、昨年開始されたリモート参加を「zoom」に一本に絞り簡素にしました。学部学生による研究発表から始まり、大学院修士・博士課程発表と続き、特別講演(令和4年度丸木記念特別賞受賞者成果発表)、本学創立50周年記念特別研究費受賞者の進捗報告と盛り沢山の成果が披露されました。特に学部学生の研究発表では、研究の出発点となるリサーチ・クエスチョンが明確で、研究内容自体もハイレベルになった印象を持ちました。また質疑への応答でも堂々とした立ち振る舞いで、学生自身が真剣に研究と向き合ってきたことが感じ取れるものでした。彼らの研究マインドに敬服するとともに、将来がとても楽しみです。

第一部・第二部を合わせると、学部学生から大学院生、教職員まで、それぞれの立場で、研究のことで頭がいっぱいになった一日になったことと思います。この特集では発表当日のプログラムをご覧いただき、学内交流と共に新たな研究成果につながるヒントを掴んで頂けることを願っています。令和6年も開催いたしますので、是非ご参加ください。